
温泉に行こう

クノウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

温泉に行こう

【Nコード】

N1317A

【作者名】

クノウ

【あらすじ】

みんな温泉に行こう！

ピチャ——ン

.....

「.....。」

「.....。」

「.....なあ、ちせ。」

「はっ、はい!？」

「その.....だな?こ、これは仕方のないことだからな?俺もちせも知らなかった。というか、教えなかったあいつらが悪い!!」

「う、うん。そうだよな。」

「.....そ、そろそろ体もあつたまつたな。」

うっ、声が不自然なほどに上ずる

「あ、あたしもっ.....」

『ガラッ!』

「「!?!?」」

『みんなで温泉!~!』

五日前

アツシ「なあ、シュウジ。今度の日曜に遊びに行かないか？」

シュウジ「ん？ああ、日曜はちせとデートだから無理。」

「それなら大丈夫。ちせちゃんも誘ってみんなで行けばいいんだから。」

「それって、何処へ行くんだよ……」

「それは……此処だ！！」

「それって……」

アツシがポケットから取り出した物——それは

「温泉旅行のチケット……！！」 何処からか懐かしい音楽が……

「どうしたんだ？それ。」

「いや、商店街の福引で奇跡的に当てちゃってさ！！五人までOKらしいからシュウジ達もどうかと思つて。」

（ご都合主義なんで、設定に深くは突っ込まないでください）

「温泉か……」

「そうだ！！どうだ？行きたくねえか？」

「そりゃ、行きたいけどよ。他に誰が行くんだ？」

「とりあえず俺はアケミを誘つつもりなんだけども……。」

「それで、何で俺とちせをそこに呼ぶんだよ。」

「だ……！解つてねえなあ、シュウジ。俺たち親友だろ？人数は足りてるんだ、お前も誘つてやろうとした俺の気持ちは分からないか？」

「………で、何を企んでる……」

「………何のことだ。」

「何だその間は。明らかに何か隠してるだろ。」

正直俺だつて行きたい。それも、ちせと一緒になら尚更……

だが、アツシが無料で一緒に連れて行くとは考えられない。何か裏

がありそうだ。

「くっ！ーやはりシュウジには話さないとダメそうだな……。」「
やはり何かあるんだな

「実は……………親に旅行に行くって言ったらな……………」

『ドゲシッ！！』

「イテッ！？ 何するんだよシュウジ。」

「いや、なんとなく殴つといた。」

なんだか嫌な予感がするぞ？

「そうか。それで話の続きなんだけど……………」

「ああ。」

「ゴニョゴニョ……………」

「……………」

「でな？ゴニョゴニョ……………」

「フム……………そういう魂胆か！！」

「ダメか？」

「……………ダメと言いたい所だけど、仕方ない。無料で行けるんだから
その条件飲んでやるよ。」

「マジか？ありがとうな、シュウジ。」

「アケミの了解は貰ったのか？用事があるかも知れないだろ？」

「それなら大丈夫。予定はキャンセルになって来れるはずだから。」

「何で知ってた？」

「次の日曜は、題して『シュウジとちせちゃんのラブラブデート、
みんなで見守りましょう大会（仮）』をやる予定だったから。」

「……………誰が企画したんだよ……………」

「ああ、もちろんアケミからデートの情報をもらってだな、俺が企画…ブハアアアッ！！！！？」

とりあえず吹っ飛ばした

そして日曜日――

「わりい、ちせ。少し遅れたか？」

「う、うん。あたしも五分ぐらい前に来たばかりだから、大丈夫。」

「そっか、じゃあ行くか。」

「う、うん。」

突然今日のデートはキャンセルして旅行に行こうと言ったときは驚かれたが、アツシとアケミ達と一緒に行こうと言ったらしぶしぶ承諾してくれた。

とりあえず、みんなとの待ち合わせ場所――駅前に来た。

「オッス。あいかわらずラブラブだな、二人とも。」

「何だよ、アツシ。その挨拶は。」

「おはよ、ちせ。ついでにシュウジも。」

「あ、おはよう。アケミ、アツシ君。」

「ついでというのは気に食わないがまあ、おはよう。」

「まあ、いいじゃないかシュウジ。ところで今日は絶好の旅行日和だな。」

「思いきり曇ってるぞ……。」

「気分の問題だ。」

「そうか？」

「あゝ、ちよつとちせ、いい？」

「なに？アケミ。」

「こつちこつち。」

くアケミ くちせsideく

「いやゝ、ただで温泉にいけるなんてついてるわね。」

「うん。温泉久しぶりだな。」

「そんな事言つてゝ、ホントはシュウジと旅行にいけるのが楽しみでしょうがないんですよ。」

「そ、そそそそんな事……………（真っ赤）」

「まあそれはさて置き、ちせ、今日はせっかくの温泉なんだから気合入れてくのよ？」

「う、うん！！頑張る。」

「そうよ、ちせ。今日行くのは何て言つたつて“あの”温泉なんだから。」

「？」

くシュウジ くアツシsideく

「シュウジ、例の件は大丈夫だったか？」

「ああ、意外とすんなり決まったよ。」

「そうか、それは良かった。」

「まあ、せっかく連れて行ってもらえるんだからな。結構喜んでぞ。」

「ははは。俺の運に感謝しとけよ。」

「調子に乗るなよな。ところでさ、パンフレットだけじゃよく分かんなかったけどお前が言ってた“楽しみ”ってなんだ？」

「あれ？まだ言ってなかったか。というか、パンフにあったと思うんだけどな？」

福引の商品とはいえ、変な所へ招待はしないだろう
でも、アツシの楽しみなことというのがどうにも気になる……

「まあ、そう言うことだ。期待しとけよ？」

「なんだよ、それ。料理が美味しいのか？それとも景色がいいのかか？」

「行けば分かる……。」

「？」

話は戻って……

「ねえ、これで全員？」

「いや、後一人来るよ。」

「「え！？」」

「シュウジ、まだ来ないのか？」

「俺は先に出たからな」。でも、そろそろ来ると思っただけだな……」

そう。この最後の一人がちょっと厄介な人だった別に嫌いなわけじゃない。どちらかといえば好きの部類に入る人ではある。

アツシとアケミは面識が在るからいいだろう。でも、ちせとは初対面となる。

二人とも、どういう反応をするだろうか… 不安だ。

「あと一人って、誰が来るのよ？あたしの知ってる人？」

「知ってる人だから大丈夫だ安心しろ。」

「そう？」

と、ちょうどその時目の前にタクシーが止まった

運転手「2800円になります。」

？「え」と…はい。」

運「はい、ちょうどですね。毎度あり。旅行楽しんでくださいね“奥さん”」

？「あら、ありがとうございます。」

ブロロロロロロ……

？「あら？みんなもう揃ってたのね。遅くなっちゃったかしら？」

「いや、大丈夫だよ。かあ『おばさん！？』」

？「あら、アケミちゃん久しぶりね。アツシ君も今日は誘って貰っちゃって悪いわね。」

「いえいえ、そんな。こちらこそ急に誘ったりしてすみません。」

？「そんなことないわよ、温泉に連れて行ってもらえるんだから…。それに、」

うつ、きたか……

？「初めてシュウちゃんの彼女に会えたんですもの。来て本当によかったわ〜。」

「え？えっ！？」

「初めまして、シュウジの母です。」

母さんはちせに向かって優しく微笑んだ

「お母さんですか！？ あ、そのっ！私はちせと言います。よ、よろしく願います！！」

案の定ちせは緊張してしまっている

「もう、シュウジもこんな可愛い彼女がいるんなら、早く紹介してくればよかったのに。」

「い、いいだろ、別に。」

「もう。至らない息子ですけど、これからもよろしくね、ちせちゃん。」

「いえー！こちらこそ、シュウジ君にはいつも迷惑かけちゃって、その、あの……いつも助けてもらってばかりです。」

「ふふっ。シュウジもほんとに良い娘を見つけたわね〜。お父さんにも報告しなくちゃ。ああ、そうそう。ちせちゃん、私のことは気軽に義母さんって呼んでね。」

全員「ええええー！！？」

「か、母さん……、それは……」

「あら？いずれちせちゃんもシュウジのお嫁さんになるんじゃないの？なら、今から慣れておかないと〜」

「そっじゃなくて……」

『それとも、ちせちゃんとは遊びで付き合ってるの?』
シ——ン

一瞬、その場が凍りついた

「そ、そうじゃなくて、まだ将来のことは早すぎるって。俺はちゃんとちせのことが好きでつき合ってるし、いずれはちゃんと結婚を

……」

「おい、シュウジ……」

「へ?」

「こんなところで惚気話は止めとけ。ちせちゃんが茹蛸になってる。」

「

アツシにそう言われ後ろを振り向くと、そこには顔を真っ赤にしたちせがいた

「大丈夫か、ちせ。」

「え、あ……う、うん。その…… あたし……、シュウちゃんの……お嫁……さん。」

最後の方は何て言ってるのか聞き取れなかった

「あらあら。どうやら心配は要らないみたいね。それより、そろそろ時間じゃないかしら?」

「「えっ!?!」」

「おいアツシ、時間はどれくらいだ?」

「え」と……あと五分ぐらいで電車が出ちゃう!」

「なら早く行くぞ。ちせ、かーちゃん、荷物持ってやるから走って。」

「うん。」

「ありがとね、シュウジ。」

その後、何とか電車に間に合い、車内では色々な話（主に俺とちせのことだが）で盛り上がっていた

と、そんなこんなで旅館に到着

俺たちは受付を済まし、部屋まで来ていた

「なあシュウジ、晩飯まで時間はあるしこれからどうする?」

「俺は、もう少しここでんびりしてたいんだけど……。かーちゃんはどうする?」

「私は、ご近所のみんなにお土産を買ってから、ちょっとお店を見に行くわ。」

「あつ、おばさん。あたしも行きます。サトミに五月蠅くせがまれてるから。」

「じゃあ、私たちは二人でお土産を見てくるわね。」

「アツシは?」

「俺は、もうちょっと荷物整理してから風呂だな。温泉に来たんだからやっぱり温泉に入らなくちゃ。」

それもそうだな。俺も入りに行くか?

「で、ちせは?」

「あ、あたしは、先に温泉に行きたいな……。」「

ちせは温泉か……

「じゃあ、俺も少し休んだら風呂に行くよ。敦も行くんだろ?」

「おう!ー!ここは男の友情を育もうぜ、シュウジ。」

「なんか気持ち悪いぞ、アツシ……」

「なんだよ、お前だってほんとにはアレを期待してんだろ？」
朝からいつたい何のことだ？

「まあいいや。じゃ、そういうことでちせ、一緒に行こうぜ。」
「うん。」

「じゃつ、あたしとおばさんもお土産見たら風呂に行くから、それまで襲っちゃダメよ、シュウジ。」

「襲うか！……！」
たく、疲れるやつだ

数分後……

「アツシ、お前さっきから何やってんだ？」
荷物整理を言うてから、ずっとバックの中をゴソゴソとして
いる

「いや、確かにバックに入れたと思ったんだけど、荷物が一つ見つ
からなくて。」

「大事なもんか？」

「別に無くてもいいんだけどな。風呂に入るんなら、自分のが良い
と思って……」

自分の？ 一体なにを用意したんだ？

「もう少し探してみるからさ、シュウジとちせちゃんは先に行つて
てくれよ」

「分かった。じゃあ行くかちせ。」

「うん。じゃあアツシ君お先に。」

「ああ。俺が行くまで楽しんでるよ」
何をだよ、おい

「シュウちゃん、早く行こう。」
「おう。」

そして風呂の入り口でちせと別れ、脱衣所で服を脱ぎ、温泉に入った偶然か、他に客はいない。

「たまにはこういうのもいいな……」

俺は誰もいない温泉ですっかりくつろいでいた

『ガラガラ』

ドアの開く音がした

（アツシが来たのか？）

湯煙とメガネが無いせいで、相手が良く見えない

すると、相手が近づいてきた

「え！？」

相手が声を出した

（この声はアツシじゃないな、他の客か？それにしても、可愛らしい声……しかもちせのような……って！？）

そのとき、湯煙が晴れて相手の顔が見えた

「シュウちゃん！！！？」

「ちせ！！！？」

ちせは恥かしかったのか、湯船にもぐって反対側を向いた

「な、何でシュウちゃんがここにいるの！？」

「何でって、ここは男湯だろ？」

そう言って入り口を指さす

「ここは女湯だよ!!」
「ちせも入り口を指差す」

「そこにあるのは……」

「「えっ!?!」」

「二つの入り口、それぞれには男と女の文字が書いてある」

「「混浴!?!」」

「そして話は最初に戻るのだった」

「「……シュウちゃん、このこと知ってたの?」」
「知ってるはずないだろ!! 知ってたら別の風呂に入ってる。」
「うう」……」

「「……なあ、ちせ。」」
「はっ、はい!?!」」

「「その……だな? こ、これは仕方のないことだからな? 俺もちせも知らなかった。というか、教えなかったあいつらが悪い!?!」」
「う、うん。そうだよな。」

「「……そ、そろそろ体もあつたまつたな。」」
「あ、あたしもう……」」

「『ガラッ!』」
「「!?!?!?!」」

？「おつ？誰もいないのか？シュウジがいると思ったんだけどな。もう出たのかな？」

どうやらアツシのようだ

（ねえシュウちゃん、何で隠れちゃったの？）

（いや、なんとなく……）

そういえば、俺は何も隠れる必要はないんだよなというわけで、岩の陰から出て行こうとしたとき

『ガラッ！』

「「！！？」」「

「あら、なかなか良い温泉ね。」

「そうですね、おばさん。」

（この声は…アケミとかーちゃん！？）

「おい、アケミ。シュウジ達見なかったか？」

「あ、居たのアツシ。見なかったけど、居ないの？」

「ああ。先に入っただけなんだけど、入れ違いになったのか居ないんだよ。何処に行ってるんだ？」

「途中でどこかに寄ってるんじゃないの？あたしとおばさんが部屋に戻った後にお土産を見に来たとか。」

「ああ、そうかもな。」

どうやら、このままやり過ごせそうだ

（シュウちゃん。あたし、熱くなってきた…）

（我慢しろ、ちせ。ここで二人きりのところを見つかったら、何言

われるか分かったもんじゃないぞ。」

（うん。）

「ホントあの二人は仲が良いわね。」

「ああ。羨ましいぐらいだ。普段はあんなに仏頂面のくせして、シユウジもやつぱり男だったというわけだ。」

二人は一緒になってしみじみと頷いている

（あの二人、俺の事をそんな風に見てたのか… 自分達だって噂になってるくせに…）

アツシとアケミも、このところ妙に仲がいいと噂される校内の力ツプルの一組だった

「そんなにあの二人は仲が良いんですか？」
かーちゃんも話に加わってきた

「ええ、付き合いはじめたころは二人とももう、見てられないくらいに不器用で…」

「ほんと危なつかしくて… せつかく告白してきたちせちゃんが可愛そうだったよな。」

「でも、交換日記始めた頃からかな？ なんだか妙に二人の雰囲気が良いくなったの。」

「そうなのか？ 俺は札幌に買い物に行った後ぐらいから、さらに只ならぬ雰囲気を感じるけどな。」

「そうよねあの二人。何だか只ならぬ関係というか、誰にもいえない秘密とか持ってるみたいだし……。」

「二人だけの秘密を持つとは、なかなか進んでるんじゃないか？」

（あの二人、言いたい放題言いやがって…！）

（うつう…）

「お二人の話を聞く限りでは、本当にシュウジとちせちゃんは仲が
良いのね。ほんとに娘ができたみたいで嬉しいわ。」

「そ、それはよかったですね……（汗）」

「でも、このままいくと本当にそうなりそうだな、あの二人。」

「ほんとよ。ちせも中学の頃から好きだった相手だから、想いがか
なつてこのままどこまでも突っ走っちゃいそうで……。」

（うう、そんな事しないよー!!）

（こ、こら。落ち着けちせ!!）

「それにしても遅いよな？あの二人。」

「そうね。シュウジもちせも何やってるんだろ？」

「もしかして、レンタルの水着選ぶのに手間取ってるんじゃない？
大方、ちせがこの水着は恥かしい」とか言つて。」

「それはありえるかもしれないな。俺なんか、ちゃんと自分の水着
持ってきたんだぜ。」

さつきバツクの中を探していたのはこのためだった

（なに！？レンタルの水着！？ちせ、知ってたか？）

（知らないよ！！そんなの聞いてないもん。）

（つて、よく見るとアケミもかーちゃんも水着着てるし。）

（ほんとだ！？）

「そういえば、ちせちゃんにはここが混浴だつて教えたのか？アケ
ミ。」

「何言つてるのよ。こんな面白いこと、あたしが教えるわけ無いじ
やない。もちろん秘密よ。」

「えっ！？おれ、シュウジにも教えてないぞ？」

「あらあら。わたしは、てつきりシュウジも知ってる物と思って話
してないですよ？」

「「「……………」」」
((……………))

「ははは!!まさかなあ?(汗)」

「そ、そうよ。まさかねえ?(汗)」

「あらあら(笑)」

「二人とも、今頃デートしてるんじゃないか?」

「そうね。きつと、そのあたりでも散歩してるのよ、きつと。」

「もしかしたら、混浴と水着に気付かず二人でお風呂に入ったのかもしれないね。」

爆弾発言だった

「いや、幾らなんでも……………」

「待てよアケミ。もしもそうだとしたらさ、今頃あの二人…………裸で……………」

『そんな事するか!!!!!』

「あつ!!シユウちゃん。」

「「「……………」」」

「「あつ……………」」

「シユウジー!!あんた何やってん「待つて、アケミちゃん。」えっ?」

「かーちゃん……………」

「お義母さん……………」

「私、ダメな母親ね……」

「は？」

「自分の息子が、もう自分の元を巣立とうとしているのに、全然気付いていなかったなんて……（涙目）」

「かーちゃん？」

「なんだか嫌な予感が」

「いいのよ、シュウジ。母さんは分かってるから。ほら、アツシ君もアケミちゃんも、二人の邪魔にならないように私たちはそろそろでましようか。」

「そうですね。そのほうが良いようですし（キッ！！）」
怖いぞ、アケミ

「羨ましいぞ……シュウジ。」
哀れむような目で見えるな、アツシ

こうして、何も言えないうちにみんな出て行ってしまった

「どうしよう、シュウちゃん。」

「どうするって、俺たちも出るしかないだろ。」

「そうだね。」

俺たちの温泉旅行は、こうして散々な結果となってしまった

その後――

部屋に帰った俺は、かーちゃんの誤解を解こうとした

ガラッ

「かーちゃん！！ あれ？」

「シュウちゃん、どうしたの？」

「部屋に誰もいないんだ。」

「えっ！？」

「何処に行ったんだ？みんなして。」

そして、隣の部屋に入った時！！

「ゲッ！？」

「はうっ！？」

一組の布団と、二つの枕。

そして、書置きが一つ。

『私たちは別の部屋に移らせてもらったので、二人でゆっくりと過
ごしてね。 by 母より』

と、あったのだった

くおわりく

（後書き）

< font size = 2 > 最初は海にでも行くSSを書こうとしたんですけど北海道に海水浴場なんかないだろうし、なら、いつもの温泉は？ と思ったらこんなSSを書いてました。

私が書くSSの中では、シュウジとちせはとことんラブラブ。アツシはちよっとおバカキャラ。今回出番のなかったノリとタケはとことん弄られキャラと化していることが大半です。

皆さんは気に入ってくれますかね？ まあ、けっこうノリで書いてるんで、かなりキャラの性格が変わってますがお構いなく。

ちなみに、アニメ化された某ゲームのSSのように感じた方は突っ込まないでください。自分でも分かってるんで。 < / font >

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1317a/>

温泉に行こう

2010年10月10日14時29分発行